尾張の一地域における古墳時代後半期の古墳
――富塚古墳の墳丘測量結果を基にして――

牧　謙治

1．はじめに

尾張北西部を代表する古墳群として浅井古墳群はよく知られるところである。浅井古墳群は、浅井北・浅井南の両古墳群によって構成されるのであるが、浅井古墳群のうちよく知られているのは一宮市尾関地区を中心に集中している浅井北古墳群である。この古墳群については、『新編　一宮市史　資料編３』で報告されており、古墳の主体部及び墳丘の測量、発掘調査の実施されている古墳も少なくない。

一方、同じ浅井古墳群でも浅井南古墳群では古墳の測量の行われたものは浅井神社古墳の石室のみで墳丘の測量図にいたっては現存するものはない。そこで、墳丘の現存する富塚古墳の測量調査を行い、古墳研究の基礎的データを提供するとともにそれを基にして富塚古墳について考えていきたいと思う。

また、付近には今伊勢古墳群や門間古墳群が分布しており、さらに平成６年度より発掘調査の開始された門間沼遺跡でも古墳がまとまって確認されている。これらの古墳群と浅井北・南の両古墳群とを含めた古墳時代後半期の尾張の一地域の古墳のありかたについても考察を加えていきたいと思う。

尚、ここでいう古墳時代後半期とは、５世紀後半から７世紀末までとする。また、本稿は二部構成をとりまず富塚古墳の測量調査報告を行いそして先に挙げた各古墳群について論考を行うものである。

2．富塚古墳測量調査報告

2－1．調査までの経緯

富塚古墳は、愛知県一宮市大字富塚字郷中1747に位置し、昭和42年に一宮市の指定史跡となっている。当古墳の所在する地域は、北東２㎞に浅井北古墳群、南西３㎞に今伊勢古墳群があり、富塚古墳は浅井南古墳群のなかに属する。この古墳については過去に本格的な調査はされておらず、基礎的なデータが不足している。さらに、浅井南古墳群のなかで墳丘を留めているものはほとんどなく、富塚古墳は貴重な存在といえよう。また浅井南古墳群自体の調査例及び資料も多くない。その上、富塚古墳の墳丘も年々改変していくという。そこでこの唯一現存する富塚古墳の墳丘測量を行い今後の研究の基礎的な資料とするため、さらに古墳の墳丘という貴重な文化財の保護に役立てるため富塚古墳の測量調査が行われる運びとなった。

調査は平成６年11月12日に実施し、調査に当たり一宮市博物館土本典生氏より御指導・御助言をいただいた。また、富塚町内会長さんをはじめとして地域住民の方々のご理解を得た。

調査は下記の方々の参加を持って実現した。

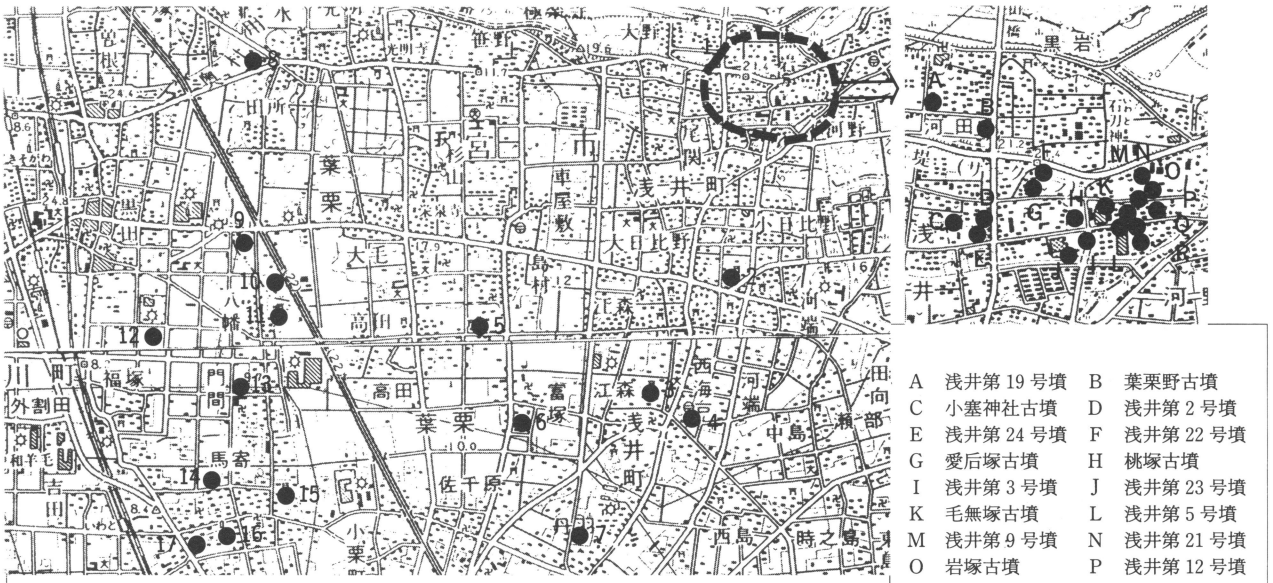
〔測量調査参加者〕

高橋信明・赤塚次郎・栗林典昭・西原正佳・飴谷　一・永井宏幸・原田　幹・織田眞弓・高田恵理子・牧　謙治

2－2．富塚古墳の沿革

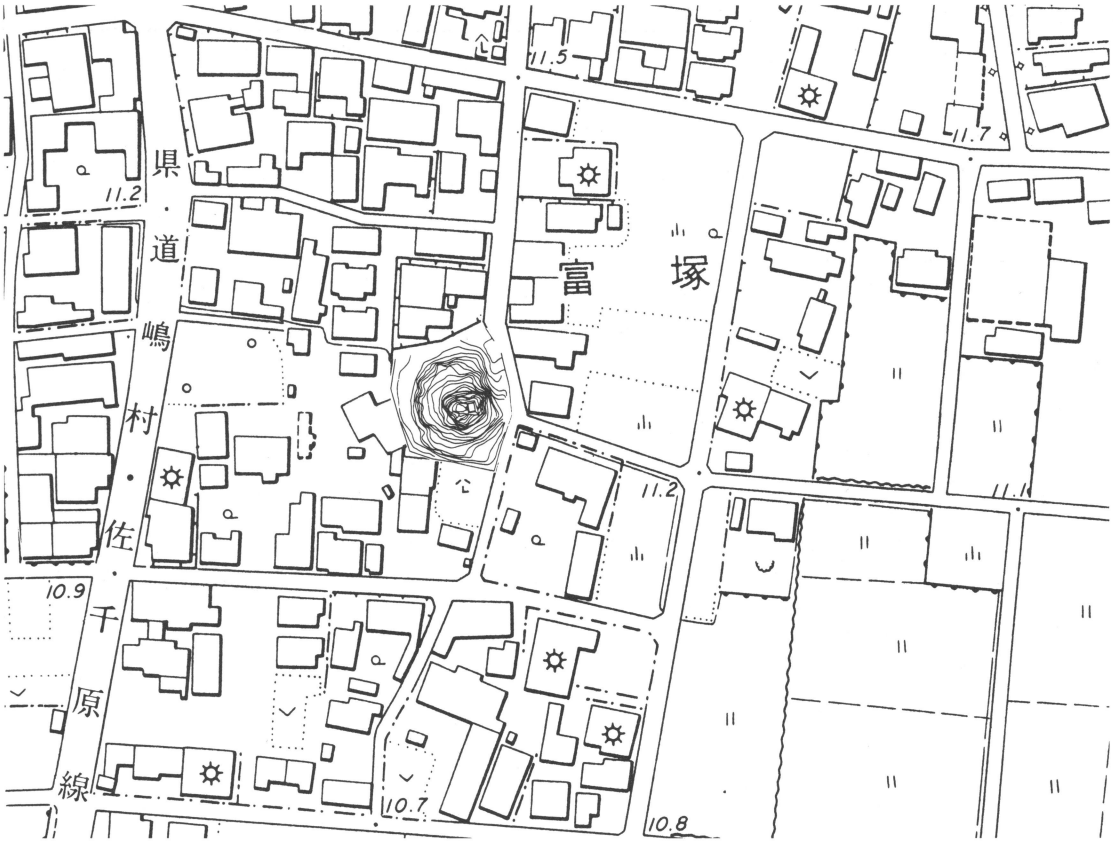
富塚古墳のある富塚地区は以前は葉栗郡富塚村であった。古墳周辺の現在の景観は、住宅及び畑地であり明治１７年の富塚村地籍図と比較してもあまり変化がない。富塚古墳及びその周辺は自然堤防上にありここを選んで住宅地や畑地としていたようである。

さて古墳そのものについてであるが明治17年の地籍図では「宅地」と記されている。ところが、



1．浅井北古墳群　2．藤塚古墳　3．浅井神社古墳　4．塩竈古墳
5．宇夫須奈神社古墳　6．富塚古墳　7．大塚古墳　8．田所遺跡
9．大毛池田遺跡　10．大毛沖遺跡　11．伊冨利部古墳　12．門間沼遺跡
13．門間古墳　14．稲荷山古墳　15．岩戸古墳　16．西口社古墳　17．上野屋古墳

第1図　主要古墳・遺跡位置図（1/50000、図中1の拡大は1/25000



第2図　富塚古墳位置図（1/2000）

昭和12年の土地宝典によると「天神社」と記されている。地域住民に話を聞くとこの古墳は以前より町内の神明社の土地であり昭和以前から天神社が祀ってあったということである。天神社は古墳の墳頂にあったが現在は神明社に合祀されている。また戦時中は町内住民の芋栽培地として利用され、町内の共有地となっていたようである。その後子供の遊び場として遊具等も置かれていたが古墳の東側に新しく公園がつくられ、古墳内の遊具は取り除かれている。昭和42年に一宮市の史跡に指定され富塚地区の町内会によって実質的な管理がされ現在にいたっている。

2－3．富塚古墳の現状と調査結果

上記に述べたように子供の遊び場になったり、住民の芋栽培用の穴が掘られるなどして所々に地形の改変が見られる。また、天神社があった墳頂は天神社の祠の礎石が残っておりコンクリートで固められている。さらに墳丘の土砂が流出した箇所は、コンクリートの杭や板が打たれている。古墳の外郭は周囲の住宅や道路への土砂の流出を防ぐためコンクリート板で土止めがしてある。墳頂には多くの樹木が生い茂っていたようであったが台風などで倒れ、その度に墳丘が改変していったそうである。しかし、全体的に墳丘の形はよくとどめていると思われる。

調査によって得られた測量図を観察するといくつかの特色が指摘できる。それを述べると、

①ほぼ円形を呈する墳丘部

②墳丘南側に存在する方形の突出部

③墳丘部東側の等高線の乱れ

以上３点である。次にこの３点について考察を加えていきたいと思う。

①ほぼ円形を呈する墳丘部

墳丘部は東側の崩れがひどいものの全体的には円形を呈し、良好に残存している。墳径約28mを測る。墳頂部が標高16mラインで囲まれた地点となる。そして、11mライン付近がなだらかなテラス状になり、11mラインより墳丘の高まりが始まるのを確認できるので墳丘部の裾は標高11mラインと考えられよう。よって、墳丘部の高さは５mと考えられる。

また、墳頂部がやや南東にずれており南東方向の12～14m付近の等高線が密になっている。墳丘の改変の可能性もあるが、本来の墳形は墳頂部自身が方形の突出部に偏っていたとも考えられよう。また、墳丘部の標高12～13mラインの間でなだらかなテラス状を形成しており、その前後で階段状に墳丘が形成されていくことが測量図より窺え、２段の段築構造があることが確認できよう。

②墳丘南側に存在する方形の突出部

墳丘部の南側には方形の突出部が付設されていることが測量図より確認できる。この突出部の規模は長さ約3.6m・高さ１m・幅14.2m・くびれ幅約14mである。測量図を見る限りでは墳丘部に比べ突出部はその形状をよく留めていると言えよう。

さてこの突出部が墳丘部に対する前方部であるのか、あるいは造り出し部であるのかという問題があるが、この突出部は墳丘部に比べて低平で、墳丘高５mに対して突出部の高さは１mと数値に開きがある。突出部の土砂流出の可能性が無いわけではないが測量図からはそのような状況は見られず、突出部については現状が古墳本来の形状に非常に近いといえよう。実測された数値より墳丘部と比較すると突出部は長さにおいて墳径の約８分の１、高さにおいては約５分の１となる。これは富塚古墳の突出部を墳丘部に対する前方部と考えうる域[1)]には達しておらず、よってこの突出部は古墳の主となる円形状の墳丘部に付設された造り出し部であると考えられよう。

③墳丘部東側の等高線の乱れ

全体が円形を呈する中で墳丘部の標高12～13mの等高線を描く部分だけが方形を呈している。地

第3図　富塚古墳測量図（1/200）

域住民からの聞き取りでは伊勢湾台風時に古墳の東側の土砂が流出したという情報もあった。等高線も11mライン以下で古墳東側に土砂の流出した状況を推定することもできる。これらの状況を総合すると墳丘の東側において土砂の流出による改変の可能性があるともいえよう。

しかし、早急な判断すべきではなく今後の調査の機会に結論は託したい。

以上の点を考え合わせ富塚古墳は造り出し付きの比較的大型な円墳と考えられよう。そしてその計測値をしめすと下記のようになる。

墳径約28m・高さ5mで南側に長さ3.6m・幅14.2m・高さ1mの造り出し部、主軸方向N−152°−W

外表施設等の葺石や埴輪の使用は確認されず、土器の散布も認められない。段築については、上記の通り2段築成を考えたい。また、周辺の状況より墳丘全体の形成については盛土によって行われているのではないかと推定される。内部構造および副葬品等については伝わっておらず不明である。

さて最後に富塚古墳の築造時期についてその性質から推測したいと思う。富塚古墳のもつ性質として次の点が挙げられる。

①浅井南古墳群の中に位置する古墳である。

②墳丘より埴輪が確認されない。

③墳径が30mクラスの大型円墳[2]である。

④墳丘高が高く、主体部として横穴式石室構造を持っている可能性がある。

以上の4点について、まず①は浅井南古墳群はそこに属する古墳より出土した遺物より形成時期を古墳時代後期[3]と考えられており、同じく浅井南古墳群に属する富塚古墳にも地域性の点から後期古墳の可能性の高さを裏付けることができるのではないだろうか。さらに②〜④は、まさに後期古墳を示唆する材料ともいえる。

よって後期古墳に富塚古墳は属し、他の類例[4]から6世紀代後半の可能性があるとしておきたい。

なお、富塚古墳には今回の調査では確認されなかった葺石、周溝の存在[5]が過去に記されている。それを今回の調査結果と照合するならば、富塚古墳は葺石のなされた周溝を持つ2段築成の造り出し付き円墳ということも可能であろう。しかもその規模は墳形30mクラスの大型円墳である。とすれば、6世紀代において当地方において相当な権力を持ち得た人物が存在し、そしてその人物が富塚古墳の被葬者ということになるのではないだろうか。

註

1）『前方後円墳集成』に記された帆立貝形前方後円墳の基準によると「前方部長が後円部径の4分の1以上で2分の1未満のものを目安にする」とあり、それを参考にした。

2）大形円墳の基準設定については『古代学研究』123　赤塚次郎氏「濃尾平野の円墳」を参考にして実施した。

3）『新編　一宮市史　資料編4』P56参照。

4）浅井北古墳群に属する毛無塚古墳は円筒埴輪を外表施設として採用している径38m・高さ3.5mの大形円墳であり、その築造時期は6世紀代前半より下がらないと考えられている。よって外表施設において埴輪の採用を確認することができない富塚古墳においては、毛無塚古墳よりも時期的に新しいと考えられよう。

5）一宮市教育委員会発行『一宮市の文化財』P75参照。尚、昭和48年発行にこの本は発行されており写真付きで富塚古墳の紹介をしている。その写真でも当時と現在とは墳丘の状況に違いが確認され昭和48年当時には確認できた葺石及び周溝が20年の歳月のなかで崩壊していった可能性は十分にあろう。

3．浅井、今伊勢、門間の後半期古墳について

富塚古墳が大型円墳であることは先程述べたが、富塚古墳と同時期の古墳が周辺にもあり、それらの古墳によって浅井南古墳群を形成している。他にも浅井北・今伊勢・門間の古墳群があり、門間沼遺跡でも５基の古墳が確認されている[6]。よって富塚古墳を個々の古墳と比較する前段階として各古墳群の持つ傾向について考える必要があるかと思う。ここでは立地・分布状況、墳形の状況より上記５群を検証し、考察することにより各古墳群の傾向を指摘したいと思う。

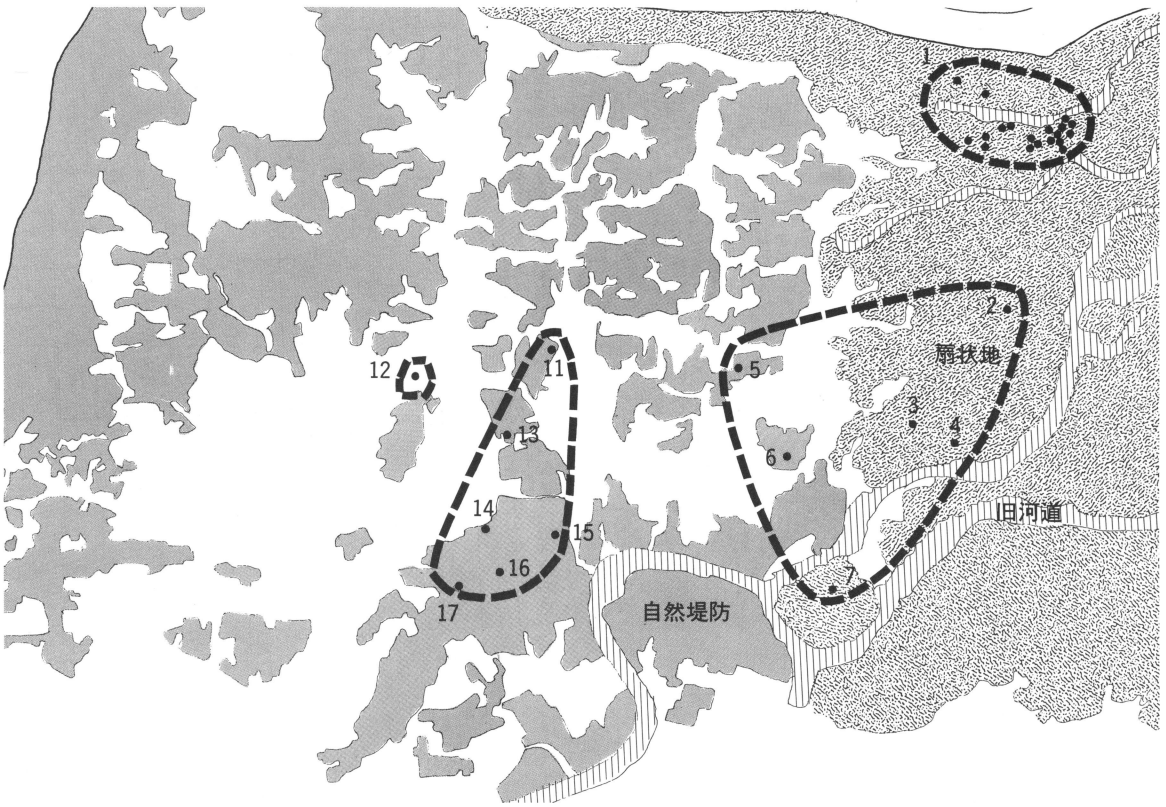
３－１．立地・分布状況

尾張北西部は往古より木曽川等の河川の氾濫や堆積作用により自然堤防とそれに伴う後背湿地、扇状地等が形成されてきた。その自然堤防上及び扇状地の先端部に古墳時代後半期の古墳を内包している遺跡が展開していることが第４図から確認できよう。

しかし、門間沼遺跡だけは例外となっている。これについては明治17年作成の門間村地籍図を参考にして当時の土地利用状況をみると、門間沼遺跡のあたりは畑が多くこのあたりが微高地であったと考えることができる。さらに門間沼遺跡では古墳の近辺に古墳時代の集落が展開するという他に見られない状況があり、立地の面で他の古墳群と異なった面をもっている。

またすべての古墳群に共通な条件として河川の流域に存在するということである。浅井北・南古墳群はいうまでもなく、門間沼・門間・今伊勢古墳群についても発掘調査・地名等[7]から古墳群が河川流域近辺に位置していたとの推測は可能であろう。これらの古墳群の成立に河川が大きな比重を占めていたと考えられる。

次に分布についてであるが、浅井古墳群という名称で浅井北・南古墳群が同じ枠組みで考えられている。しかし分布の面では第４図をみると河川



第４図　浅井・今伊勢・門間地区周辺の地形分類図（1/50000、図中の番号は第１図と同じ）

によって明らかに隔離されており浅井北古墳群は一宮市尾関地区に集中している。これは、尾関地区に集中する浅井北古墳群とそれよりさらに南に離れた浅井南古墳群と２つの勢力を分布の面から考えることができるのではないだろうか。また、今伊勢・門間古墳群については、１つのグループと考えることも分布の面から推定される。しかし、この分布の面においても門間沼遺跡は群集墳を形成する可能性を有しており、今後の調査結果により独自の古墳群を形成、或いは門間沼・門間・今伊勢を範囲とする古墳群を形成する可能性も秘めている。

以上をまとめると、①浅井北②浅井南③門間沼④今伊勢・門間といった４つのグループが立地・分布状況から浮かび上がってくるのである。

３－２．墳形

下記の表は各古墳群にどのような墳形の古墳が分布しているかをまとめたものである。浅井北古墳群については、他には例を見ない前方後円墳が採用されていることがわかる。小塞神社古墳、愛宕塚古墳、浅井21号墳の３基である。同古墳群は古墳時代後半期において急激に古墳の造墓がなされた古墳群であり、前方後円墳を権威の象徴として築く風習を受け継いだ集団が一宮市尾関地区に新しく台頭してきたと考えることもできよう。

一方、同じ浅井古墳群を形成する浅井南古墳群では、前方後円墳の分布は見られない。そして、他の古墳群には採用されてない方墳の分布を見ることができる。浅井神社古墳と大塚古墳の２基である。浅井北・南の両古墳群では互いに採用していない墳形の古墳を古墳群内に内包しており、この面からも両古墳群の成立には、歴史的背景の違いを指摘できる。

	前方後円墳	円　墳	方　墳	不　明
浅井北	3	16	0	0
浅井南	0	1	2	2
今伊勢	0(1)	3(1)	0	0
門　間	0	4	0	0
門間沼	0	5	0	0

第１表　各古墳群の墳形[8)]

今伊勢古墳群は今回扱った古墳群のなかで唯一前半期に古墳が築造されている古墳群である。同古墳群では前半期において前方後円墳を採用している。

しかし、後半期では円墳のみの採用となっており今伊勢古墳群の主流となっている。今伊勢古墳群において前半期と後半期の古墳群の連続性を見いだすことはできず、今伊勢地区に両者を繋ぐ古墳等も存在しない。別の成立背景を考える必要もあるかと思われる。

円墳のみの傾向は門間古墳群においても同様であり、今伊勢・門間の両古墳群は同じまとまりと言えよう。

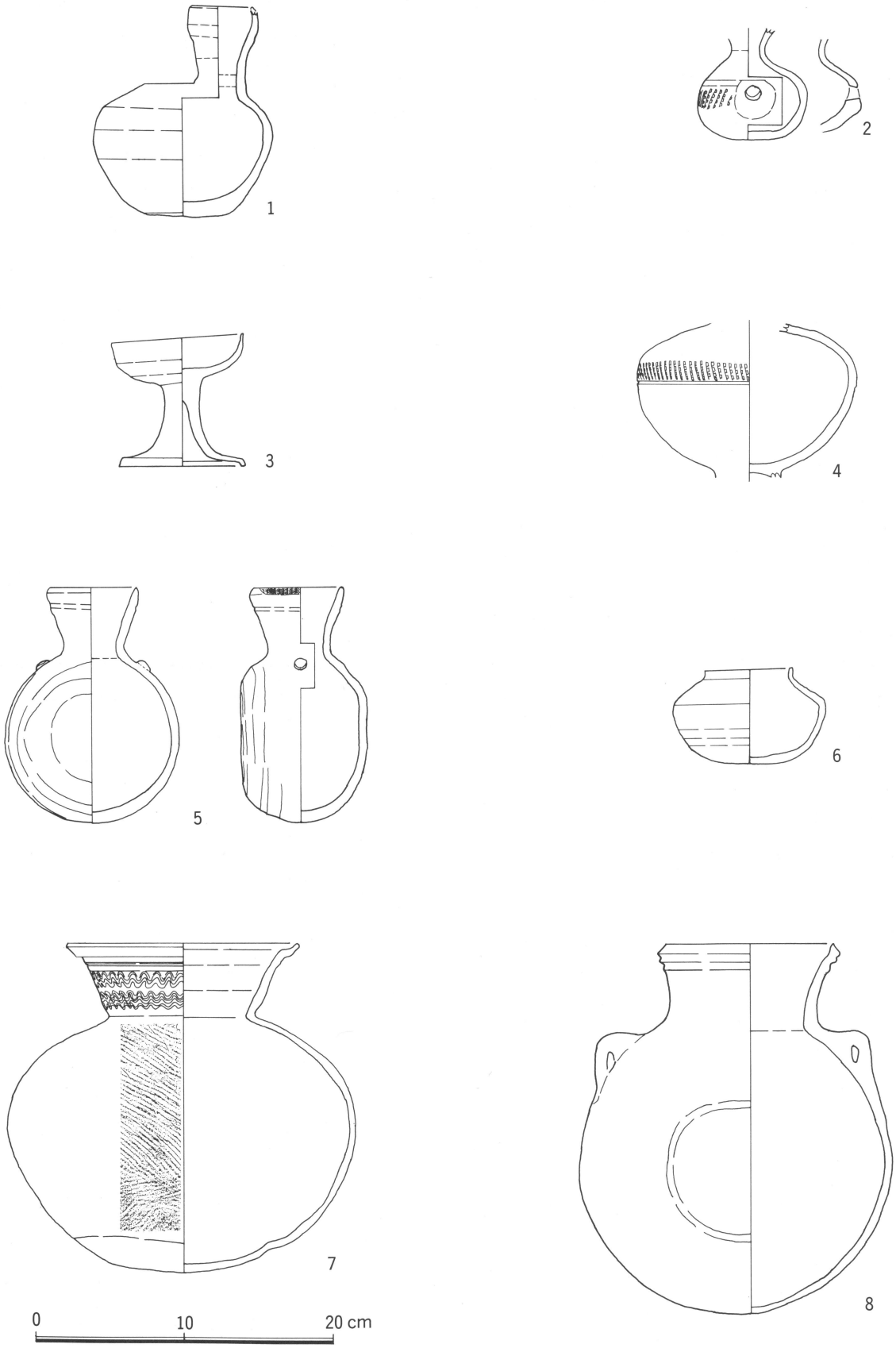
また、門間沼遺跡の古墳は同じ円墳を採用しているものの周溝を２重に巡らせており、外表施設によって今伊勢・門間の両古墳群とは異なった様相を呈している。以上のことから墳形の面からも前出の①～④のグループが存在することが確認できよう。

以上、立地・分布状況と墳形から各古墳群の傾向をしてきた。それをまとめると次のようになる。

立地においてはほとんどの古墳群が自然堤防および扇状地上といった水田耕作等には適さない箇所に立地していた。しかし、門間沼遺跡の古墳群については集落のごく近辺に形成されており他とは違った様相があった。つまり、

①門間沼　②その他の古墳群

と言った傾向が見られるのである。しかし、共通点もあり河川の付近に古墳の分布が見られ以前より述べられてきた古墳群形成に対する河川の関わりの深さ[9)]を裏付ける結果が得られた。



第５図　岩戸・上町屋・西口社各古墳出土品（1/4　1～５西口社　６、８上屋町　７岩戸）

分布状況に置いては、浅井北古墳群がある河川の周辺にまとまっており浅井南古墳群と一線を画しており、同じように門間沼と門間・今伊勢の古墳群においては門間沼遺跡がまとまって古墳を内包しており門間・今伊勢の両古墳群とは違った様相を見せていた。ここでは明らかに

①浅井北②浅井南③門間沼④今伊勢・門間

と4つのグループに分類できるのである。

次に墳形による各古墳群の違いを見ると下記の傾向が確かに見られる。

①前方後円墳の採用が見られる浅井北古墳群

②方墳の採用が見られる浅井南古墳群

③円墳に2重の周溝の見られる門間沼の古墳群

④円墳のみ採用の今伊勢・門間の両古墳群

以上の条件からみたところ大きく4つの傾向をもつグループが浅井・今伊勢・門間の古墳群には存在することが解るのである。

さらに上記の傾向には各古墳群の歴史的背景が深く関わっていると考えられ、各古墳群の成立時期からも少々述べたい。

浅井北古墳群は6世紀前半頃にその形成開始時期を考えることができるが、この地域には6世紀より遡る遺跡は5世紀後半の須恵器や土師器の確認された同者遺跡のみで古墳時代になってから生活圏の成立した地域といえよう。

浅井南古墳群は、6世紀中頃が形成時期と考えられ、浅井北古墳群より遅れることになるのであるが分布、墳形による傾向が示すように浅井北古墳群の影響を受けたとは考えにくい。また弥生時代に遡る富塚遺跡や森下遺跡が当地に存在することから古墳時代以前より生活圏が存在していたことになり浅井北古墳群とは違った傾向を示すといえよう。

今伊勢古墳群は5群のうち唯一前半期の古墳を内包する古墳群である。前半期古墳の築造時期[10]は4世紀中頃から5世紀中頃と推定されている。その後継続して古墳は築造されず、その後岩戸、上町屋、西口社の各古墳がつくられた。上記3基の後半期古墳は一宮市今伊勢町に所在する石刀神社に所蔵される須恵器（第5図）によって6世紀前半から7世紀末に築造されたと考えられる。

今伊勢地区は福塚前遺跡など弥生時代から継続する遺跡が確認されており長期にわたり生活圏が形成されている。このことから考えると今伊勢古墳群に5世紀後半に築造された古墳が今後確認される可能性も十分にあるが、前半期と後半期の古墳がそれぞれ東西に分かれて造墓されている傾向が見られるので今伊勢古墳群を東西の枠組みで考える必要もあろうかと思われる。

門間古墳群[11]については古墳から出土した資料が得られないため形成時期を論じることは困難であるが先に述べた古墳群の傾向に於いて今伊勢古墳群と共通していることからほぼ同時期と考えておきたい。

門間沼遺跡の古墳群については発掘調査によって得られた資料により、5世紀後半に古墳群の形成をみることができる。近隣の今伊勢・門間の両古墳群より先行する時期であるが前期の古墳群の傾向では違いを見せており必ずしも影響を与えたとは言いにくい。

さらに、今伊勢古墳群の前半期に継続する時期が門間沼遺跡に確認されたことにより、この古墳群が門間・今伊勢地区の古墳群の形成にどの様な影響を与えたかは今後の調査の結果の上改めて論ずることにする。

註

6）(財)愛知県埋蔵文化財センター（1994）『年報』参照

7）大毛沖遺跡の発掘調査により伊冨利部古墳の北東に南西方向に流れる河川があったことが確認された。さらに、その河川の東側で金環が出土しており伊冨利部古墳の周囲に古墳が形成されていたものと思われる。また今伊勢には舟入、江川、上河原、八丁堀などの地名がある。

8）今伊勢古墳群の（　）内の数字は前半期古墳を記したものである。前方後円墳は車塚古墳、円墳は野見神社古墳、でんやま古墳であり、でんやま古墳は径25m以上の大型円墳である。

尚、下記の表で径25m以上の円墳について見てみると2基確認され（毛無塚古墳・富塚古墳）また、墳丘高3.5m以上の円墳を探すと上記2基に伊冨利部古墳が加わる。この様な特異な性格を持った円墳がそれぞれの古墳群に存在することはとても興味深く4つのグループを考える上で重要な事例と考えたいと思う。

	径25m未満	径25m以上	高3.5m未満	高3.5m以上
浅井北	14	1	14	1
浅井南	0	1	0	1
今伊勢	3	0(1)	3	0(1)
門間	4	0	3	1
門間沼	5	0	不明	不明

第2表　各古墳群の円墳の規模

9）『新編　一宮市史』資料編3　P47参照

10）一宮市教育委員会　1992『愛知県一宮市　市内遺跡発掘調査概要報告書』P19参照

11）伊冨利部神社の周辺には金塚・金屎など製鉄・製錬が行われていたと推測される地名が残っており伊冨利部神社を氏神としていたとされる伊福部氏との関連、またこの金塚・金屎に古墳が存在していたことは注目される。

4．まとめにかえて

今回の論考は富塚古墳の墳丘測量結果と富塚古墳の性格を明らかにする前段階として尾張の一地域の各古墳群の傾向について述べた。

富塚古墳は6世紀代後半に築造の可能性を持つ30mクラスの大型円墳である。この富塚古墳の属する浅井南古墳群は同じ浅井古墳群を形成する浅井北古墳群とはその傾向が異なっている。特に墳形に於いて他の古墳群とは異なる傾向を見せた浅井南古墳群の中で際だった規模を持つ富塚古墳の他の古墳及び古墳群との関わりを解明することが必要である。そこで注目したいのが大型円墳という特徴である。

また後半期古墳群と古代寺院との関わり、未解明な部分がまだ多い門間・今伊勢地区についてもよりいっそうの調査研究が必要であり新たな機会に別稿を用意したい。

謝辞

高橋信明氏、赤塚次郎氏、土本典生氏には多くの御指導・御助言をいただきました。また、栗林典昭氏、西原正佳氏、飴谷一氏、永井宏幸氏、原田幹氏、織田眞弓氏、高田恵理子氏には測量調査に御協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

『新編一宮市史』本文編上、資料編3・4
東海埋蔵文化財研究会（1989）『断夫山古墳とその時代』
山川出版社（1989）『前方後円墳集成』
岩野見司（1993）『真清田神社史』
(財)愛知県埋蔵文化財センター（1994）『年報』